

【早夜エピソード】1993年、7月25日、ドイツのエッセンにて、3人居る兄弟の中の二男として生まれる。裕福な家庭の生まれであり、その血統も優秀なドイツの名門貴族だった。しかし12歳を過ぎた頃にサーニャは家を離れてしまう。理由は両親からの過度のプレッシャーやサーニャに対する否定、言い表せないような事の積み重ねであった。

幼い頃から両親の財力を頼りに兄と共に英才教育を受けてきたサーニャは、いつしか長男と自分との才の方向性や両親の求めてくる理想に疑問を抱き始め、家を出る前年、11歳の頃にその事を兄へと打ち明けた。しかし一番身近な存在であった兄にも否定されたサーニャは、自然と自分がやりたい事を探し始めていた。

幼いころから計算は得意だった。また物事の性質やしぐみなどを理解するのも得意であったが、兄弟たちに政治家を目指すように言う両親としては、それは必要のない才であった。しかしサーニャは両親からの教育を通して自分に備わっている才を自分自身で見分け、兄から否定されてからはやりたい事を探し始めた。そして、いずれは家を出る事も視野に入れていたサーニャは貯金をし、12歳のころには弾丸ではあるものの国外へと出れるほどの資金は集まっていた。

2005年、12歳の夏の事。いつものように図書館へ行こうとすると母親に呼び止められる。既に両親に諦められていたと思っていたサーニャは、自分が両親の興味を引いた事に興味をそそられ、母親の言うままに家のリビングへと向かった。リビングでは父親と兄が談笑していたが、サーニャが部屋に入ると黙り込み椅子に座り直し、母親はサーニャに兄の隣に座るように言うと、自分は父親の隣へと座った。

父親はコーヒーを一口口に含めば、サーニャに話しかけた。内容はいわゆる説教で、『家庭での生活態度や教育に向かう態度に対する説教』だった。元より反抗をしたり自分の意見を述べるような性格ではないサーニャは黙ってそれを聞いていたが、両親の想いや兄の考えが自分の目指すものと違うと確信したサーニャは家を出ることを決めた。

いつでも家を出れるようにと荷物は既に纏めてあった。問題はいつ行動を起こすかだが、サーニャは昼食の時間には両親や最も家を抜け出すのに適していると考えた。両親や兄だけでなく、召使いも食事の用意で屋敷の一点に集まるからである。サーニャはその時間帯を見計らい屋敷から出る事が出来た。行く宛は無かったものの、両親も届けを出さないだろうし、なるべく遠くまで行った後に孤児院にでも拾われればいいと思っていた。

エッセンはライン川に面しており、南の沿線には「デュッセルドルフ」なるエッセンと同程度栄える都市があった。また孤児院もあり、目指すはそこと決めていた。徒歩でエッセン中央駅まで行けば、そこからは電車で40分ほど。時間はかかるものの道中は目立たない道であり、無難なルートだった。無事デュッセルドルフへと着いた後は、特に目指す場所ややりたい事も無く、公共施設の場所や人の集まる場所を確認しながらライン川へと目指した。

しかし12歳にして身体や背丈の発育が比較的遅かったサーニャは、一人きりで街を歩くにはそれなりに目立ってしまいライン川に着くまでに補導されてしまう。サーニャとしてはむしろそれが望みではあったものの、サーニャがなにも言わず、黙り込んでいたために警察署へと送られてしまったのが予想外であり不都合なことでもあった。また所持金の殆どを下着に隠しており、財布の中の少ない残高を見た警察は「徘徊し始めてからそう短くはない」と判断した。

その後もサーニャは何も話さず、身元が知れるような物も家に置いたままであったために、保留となりながらも半月ほどで孤児院へと送られた。サーニャの思惑通りだった。孤児院へと送られてからはデュッセルドルフ市内の様々な大学図書館へと通い、自らが学びたい教養を身につけていった。

13歳の秋。いつものように市内の国立大学の図書館へと訪れると、一人の男性に声をかけられる。名は「Adalbert Schumann(アダルベルト・シューマン)」。彼はベルギーとの国境沿いにあるアーヘンという街の大学で教授をしており、科学者であると話す。サーニャが孤児院にて暮らしている事を知っての行動であり、更に彼は「養子としてうちへと来ないか」と、質のある教養を与える事を条件に誘いかけて来た。

サーニャは当然不信感を覚えそれを拒否。その日はそれで切り上げ孤児院へと戻った。次の日からは場所を変え、なるべくアダルベルトと会わぬようにと用心をしながらその後もその生活を

続けていたものの、その年の冬に彼と再び出会ってしまう。そこでサーニャに食事の予定を押し付けたアダルベルトは、その日はそれだけでサーニャの前から去った。

今日は金曜で、指定されたのは来週の水曜、夜の7時半。場所はサーニャのいるデュッセルドルフ市内のレストランであり、よく見かける店だった。それなりに価格は高そうな外見であり、孤児院の食事にも飽きてきていたサーニャは冷やかにだけでも行ってやろうと思っていた。

水曜日。きちんと乳母に許可を取り、サーニャは孤児院を出てレストランへと向かった。久々の夜間外出であり、また待ち合わせも高価なレストランということなので多少は服を選ぶことにした。レストランの前には一人の髪の長い女性がサーニャ待っていた。一見男性に見えたが、女性的な要素も微かに感じ取れ、実際聞いてみると女性だということだった。アダルベルトの待つ席へと着く間に彼女の名を聞いた。「Cosima Adalbert(コジマ・アダルベルト)」というらしい。

席へと着くと、見計らっていたように店員がドリンクを運んでくる。それから軽く話を聞いたところ、彼女も孤児院出身で、ファミリーネームは彼の名前から取ったそう。そのため以下は彼のことを「シューマン」と記述する。シューマンとコジマは共にアーヘン工科大学で教授、助教をしており、シューマンは主に理学や工学、医学等を得意としていて、コジマは主に理学、文学、その他は社会学を学んでいると話す。サーニャも自分の得意な分野や自分の事を聞かれ、大まかに答えていた。暫くそんな会話をし、料理が出てくると会話は本題へと入っていく。養子になってくれれば望む教養を与えること、養子という形でなくても特に問題は無いが、そのほうが都合や勝手も効くこと、そして基本的な行動の自由は守ること。その3つの条件をシューマンは話した。信用ある人間ではあるようだが、相手の条件を呑むだけではサーニャとしては満足できなかった。そこでサーニャは「親と縁を切らせてくれないか」と、孤児院へと来た経緯を話し、こちらも条件を出した。

シューマンとコジマは驚いた様子であったものの、二人でくすりと笑った後、シューマンは優しく笑って承諾してくれた。

孤児院を去った後はコジマとシューマン、三人で、大学寮で生活を始めた。学校へは通いつつ、帰れば二人に、主にシューマンに興味のある工学を習っていた。コジマは人相は良さそうではあったものの、サーニャは彼女とあまり馴染めずにいた。そんな生活を一年ほど続けた。

ある日、シューマンのもとに一つの依頼が来た。薬学に精通する彼に、神経剤の開発をどこかの会社が依頼をしたらしい。2007年の秋のことだった。それからは暫く二人共に忙しい日々が続き、サーニャも講義は講師に教わることが多くなった。

そして冬も近くなった日。どうやらシューマンがコジマを被検体とした実験で失敗をしたらしく、コジマが病院へと連れて行かれた。シューマンは酷く落ち込んでいて、寮の部屋にも帰ってきてはいなかった。料理はある程度出来たサーニャは、残る食材や足りないものを自分の貯金を崩して生活を続けた。そのまま年が明け、噂に聞いた話にはシューマンは町の郊外でピストルを使い命を絶ったらしい。自分の中では仮初の関係ではあったものの、人の良かった彼を亡くしたサーニャは驚きを隠せず、彼としては珍しく哀しみを覚えた。

3月ほどにはコジマが病院から帰ってきたが、彼女はそのことは知らない様子だった。というよりはあまり考えないようにしているようにも見えた。それからは彼の講義を受けたサーニャも協力しながら、コジマと二人で神経剤の開発を進めて、12月には薬剤が完成した。それは2009年、16歳のころの事だった。大学や国にまで功績を讃えられたコジマは講師に昇格、高い能力と才を認められたサーニャはアーヘン工科大学の講義の受講権利を譲渡された。

しかしその年の冬、講師となったコジマは政府に呼び出され研究施設へと発ってしまった。当時こそ詳細は話してはもらえなかったものの、彼女は艦娘の開発の為海軍技術研究開発局へと呼び出されたそう。それからは寮の部屋では一人きりになったものの、シューマンの遺した貯金や時折届くコジマからの仕送りで生活を続けていた。

それから暫く経ち、2010年の春の事。コジマから一通の手紙が来た。宛名はシューマン。本文には私へ宛てたものもあった。内容は、今何処で、何をしているか、どんな生活をしているか、サーニャは変わらないか、というものだった。

それを見てしまったサーニャはいたたまれず、短い文面から、コジマの人柄や性格を理解した。かつては同じ食卓を囲った彼女の、そんな純粋な文字の並びを見てみると、とても真実など伝える気にはなれなかった。サーニャは、手紙の返事を自ら書くことにした。筆跡をシューマンの字にぬかりなく真似る。そんな技術を身につけるまでに2週間は要した。シューマンのアルファベットや数字の書き方、サインのクセまで完全に似せて、サーニャは返事を書いた。自分はアーヘンの郊外に住んでいて、サーニャは未だ寮に住んでいる。という設定を書き、相手を案ずる内容も書き加えた。

それから1週間ほど経った後、二通目の手紙が届く。無事でいたようで安心したこと、近いうちに戻れば嬉しい、と、一通目よりも大きめの文字で書かれていた。

心は痛んだ。しかし、彼女が真実を知り、彼女自身が強く心を痛めるのが怖かった。

しかし返事は書けなかった。文面としても返答を求めるようなものでも無かったし、もともと書く必要は無かったのかもしれないが、これほど喜ぶ彼女に掛ける言葉が何なのか、シューマンなら何と言うのかが解らなかった。

それからは、ひと月ごとに手紙が届くようになった。彼女の得意な工学技術や、プログラミングのスキルを使いシューマンの多くの筆跡のデータからランダムに文字を選出するプログラムを作ったり、ペンを走らせ印字するタイプライターなど、研究や開発がてらに手紙を書いていた。文面が変になるので手紙を書くときは自分がサーニャであるという事を忘れて、しがらみを抱えながら書かないようにしていた。

2016年、23歳になった頃。サーニャは飛び級で入学したアーヘン工科大学にて理学部、建築学部、工学部、経営学部等を学び、その時点では理学部と工学部を履修した。その頃には3月に一度ほどに来るようになっていたコジマからの手紙の返事に、隠すわけにもいかずその事を書いた。

すると、案の定コジマは久々にそちらへ行くという旨の手紙を出してきた。心身ともに成長したサーニャには覚悟は出来ていたし、隠し通せる気もしていなかったのも、元から大学卒業を期にコジマに打ち明けるつもりではいた。

その1週間後。コジマは久々に大学の寮へと戻ってきた。長かった髪はぱつぱりと切り、前よりも笑顔が多いように見えたが、それは嬉しさ故なのだろう。

心が痛む中、コジマを寮の部屋へと入れる。当然中にはシューマンは居ない。しかし彼女は「まだ着いてないのか...。...なつかしいな...。こんな事も、よくある事だったんだよ。」

と、私に話してキッチンへと向かう。私の知らない、シューマンの意外な性格だった。そんな思いつき話を、楽しそうに話す彼女には、懐疑の念などは全く見えなかった。信じたい気持ちが論理を飛び越え、手紙の内容を全て呑み込んでしまったのか。果たしてどうなのかは分からないが、此处まで信じ込んでいるとは思っておらず。サーニャは怖気づいてしまった。

彼女が懐かしそうに、嬉しそうに思いつきをしながら、シンクの洗うのを後回しにしていた食器を洗う様を見ていたサーニャは、不覚にも涙を流してしまった。

涙が出てしまえば、そう長く持たなかった。彼女の話の遮るように床に泣き崩れれば、子供のように顔を拭いて涙を流した。それに気づいたコジマは手を止めて、サーニャのもとに駆け寄る。ガーンと涙を拭き、困惑した表情を見せている。

目を見つめ、宥めるように微笑むコジマを見ていれば、次第と落ち着いてくる。涙や嗚咽が収まれば、「大丈夫」と、一言。それから、本題へと入った。

全て話した。シューマンが自ら命を絶った事、手紙の事。彼女は最後まで、無表情で、黙って聞いていた。

感情が読めなかった。ただ読みとれたのは、サーニャに対する呆れのような、失望のような、そんな感情が、コジマの眼差しからは感じられた。

「...そうかい。...成程。」

彼女の反応はまるで『ユーゲントゲデンケン』のエーミールのように冷たい視線をサーニャに曝して、一言を言い終えればただただサーニャを見つめるだけだった。そんな時間が10分ほど、続いた。

彼女は屈みこんでいた脚を伸ばし、床に座るサーニャを一度見下してから、歩き出し部屋を去った。また、元の場所へと戻ったのかは知らないが、その後コジマからの連絡は無かった。

サーニャは、自分で実行した事ながら、そんなコジマの反応に酷く傷つき、自責した。かつて自分を子のように大切に扱ってくれた、父と母のような存在。その二人を裏切ったと思った。そんな相手に、久しぶりに顔を合わせて話した内容が、その事についての告白。しかもサーニャは、最後まで謝れずにいた。

深く考えていくうちに、サーニャは曲がった思考に辿り着く。しかしそこで彼女は執着してしまった。間違っていると分かっているからこそ自分の思いや気持ち、理想や思想などがまるで狭い場所で重なったコンセントのように、どれがどれだか分からなくなっていった。気づけばその間違った考えばかりが前へと出て、いつしかそんな、自分にとっての考えが、サーニャの心を満たしていた。

それからはまるで子供に戻ったように、大学内で皆が嫌悪を抱くような事しかできなくなった。それも心を満たすため、最初は微かに心を絞めつけていた良心も直ぐに何処かへいってしまった。

サーニャには、もう一人、幼い頃に世話を掛けていた大学の講師がいた。かつてシューマンやコジマの代わりに講義をしていた、「ラルフ・ユルゲンス(Ralf Jürgens)」。サーニャの振る舞いを見たラルフは、夜、講義室にサーニャを呼び出した。そこでラルフはサーニャに何があったのかを問い質し、サーニャの答えを聞いたラルフは驚愕した。幼くして大きな行動力を持つサーニャ。そして失敗し、自分を壊してしまうほどの自責をする若き青年。彼の成長を見届けずに旅立ったシューマンを、ラルフは憐れんだ。

ラルフは、本来であればまだ幼い子供に教えるような道徳を、サーニャに再び教えた。行動に対する代償や、それを支払わなくてはならない事を。ラルフは聞く耳を持つまでそれを続けた。

サーニャの行動は改善しているようには見えた。しかしそれゆえに大学には居づらかったのだろう。その年の秋に、サーニャはアーヘン工科大学を去った。シューマンの部屋は今もそのまま残されている。